

ふるさと交友録

～伊藤 公平～ 14

「ふるさと」には、いろいろなひとがいる。この「交友録」では、月1回のペースで公平さんの“大切なひとびと”を紹介していきます。



芸文ホール・ロビーコンサート

伊藤公平（いとうこうへい）北見市在住、郷土史研究者。私設図書館「麦の風文庫」と「野草苑があでんきたみ」主宰。平成13年～20年、みんとに「ふるさと四方山話」「ふるさと・そぞろ歩る記」を連載。

オサム、ごめん。お前んちの話お休み。

大正元年秋、森田伍郎発明の菊琴が名古屋大須観音で売り出された。二百五円。大正琴のことである。安値のオルガンでさえ十八円である。かなりの高値だったようである。

構造が簡単で独自の譜面通りに鍵盤を押さえて弦を弾けば曲が成立する。この単純さから、大正六年には爆発的な人気を呼んだ。

音色は余韻のせいかピンとかピンとかではなく、ピン、ピンと一寸ひきずるように響く。少年の頃か、古賀政男は姉の大正琴を好んで弾いたという。のちに「人生劇場」の伴奏に大正琴を使ったそうだが、この音色の機微に魅せられたからだろうか。

過日、坂悦子さん率いる琴萌会の第二回発表会、創立記念ありがとうコンサートを聞いた。四時間の長丁場、魅せられた。

大正琴は単器ではメロディーしか演奏できない弱点があつて昭和前期には人気も廃れるが、楽器の改良や演奏理論の確立等があつて、今はソプラノ・アルト・テナー・ベースの四器種が揃い、電気的技術の導入や弓奏法、和洋打楽器との共演等で、その弱点を見事に克服したようである。

何よりも面白いのは選曲と配列が、和洋の古典・民謡・歌謡曲（演・艶）歌ジャズ・ラテン etc、ジャンルを選ばない。演目の組み合わせも自由である。ある意味で、音楽の原点復帰ともいえよう。

坂悦子さんは、もともとはわが女房殿の友人だったが、今は家族ぐるみのつき合いといつていい。バイオリンや電子オルガンもそれなりの腕だが、偶々手にした大正琴の音色と簡単な奏法に魅せられて、これまでとは違った形で生涯教育のお手伝いが出来ると思つたという。あの小さくて華奢な体つきはどこに、見事なまでの指導力・統率力・牽引力、そして若さがあるのか。不思議にすてきな人である。